



修正会のお勤め（1月1日、順慶寺本堂にて）

## ◆◆ 一年始めのお勤め ◆◆

順慶寺では、大晦日 23:45 から本堂で正信偈をおつとめをする伝統がある。お勤めをしながら正月を迎えることから、そのまま修正会となって、新年のお勤めとなる。報恩講よりも軽いお勤めの内容だが、声の張りは、報恩講なみに張り上げ一年のスタートをきる。

# 順慶寺だより



印刷・発行 順慶寺  
2026年(令和8年)

**2月号**  
**VOL.388**

### ◆ うわべだけの言葉 ◆

二月の釈尊の言葉は、『ダンマパダ』より、

「先ず自ら、

相応しい振る舞いを身につけよ。

それから他人に教えなさい、

賢者は汚れてはならない」（第一五八偈）

からの出典です。

ここではまず、自らの振る舞いを正しく整えること、そうしないと、他人に物事を教えることはできないと教えて下さいます。

また、『ダンマパダ』では、続いて、

「他人に教えるように、  
同じように自身にすべきである。

実際によく自制ある者となつて訓育せよ、

自己は制御しがたいものだから」（第一五九偈）

他人にものを教えるときは、自制のある者となつていなくてはならない、思いがふらふら変わるようにでは、他人に物事を伝えられないと教えています。

ある意味当たり前のことですが、自分の身上に引き当たってみると、自分の身を律すること

**先ず自らを  
そして人を教えよ**



### 今月の釈尊の言葉

#### 若院のテーマカット NO.79



さて、今月の言葉は、ウパナンダという長老の話から出ています。  
ウパナンダ長老は、説法がうまく、人々を感じさせられます。  
動させることができ上手でしたが、そのお礼として施された布施をもらうことに慣れて、次第に高価なものを好むようなつていったと言います。  
あるとき、二人の見習いの比丘が上下の衣と毛氈を奪い合いになっていました。それを見たウパナンダ長老は、「では私が分けてやろう」と言って、上の衣と下の衣を二人に与え、自分が



**『ダンマパダ』  
158偈より**

高価な毛氈を持っていきました。

これに腹を立てた比丘たちが釈尊に相談すると、釈尊は、ウパナンダ長老に、「他人に教訓するものは最初に自分がそれに相応しいものになるべきです」と、うわべだけの言葉で人を導き、自らの行いを省みない、ウパナンダ長老を叱責したと言います。しゃせき

◇自ら信じ人を信せしむ◇

「自信教人信」という言葉は、善導大師の『往生礼讃』というお聖教から思われますが、実は難しいことです。

私も含めた多くの場合、仏教にご縁がてきてからも、經典や仏語を自分なりに解釈したり、先生の解釈を引用したりして、人に説明できるよう

①【ウパナンダ長老】  
釈迦の弟子の中で、悪事や非法行為を働き、釈迦や弟子などを困らせたとされる六人（六群比丘）の弟子たちの一  
人。ウパナンダは、釈迦族出身であるが、ときに説法せず巧みに衆人より衣の供養を受けて貯え、雨期には雨となるとわざわざ衣の施が多い所へ移り安  
居して問題を起こした。釈尊の教団では、欲が多くて智慧が足りない人たつ  
たといわれる。

**自信教人信** 〔じしんきょうじんしん〕 普化 〔ふげ〕 難中転更難 〔なんちゅうてんきょうなん〕 大悲伝 〔だいひでん〕 真成報仏恩 〔しんじょうほうぶつおん〕 (善導大師)『往生礼讚』(初夜礼讚偈)の中の一節。自ら信じ、人をして信ぜしめることは、難しい中さらに難しいことである。大悲の心を伝えてあまねく教化することが、真に仏恩に報ずることである、との意味。善導大師の語る、僧侶としての基本姿勢を示している。(浄土宗大辭典より)

おおよそ、仏教の教えは、真理と出遇いであるため、自身が肯定されることは稀です。逆に、現に存在する自身のありようを鋭く指摘されることが多い、実は避けて通りたいものです。換言すれば、自ら信ずるということが、実は離れて、他者の言葉を受容されることで初めてなされることなのです。実は重く、うけとりがたいものであります。釈尊の言葉のごとく、先ず自身はどうなのが、これが問われます。

なれば、内容を理解したように感じてしまい、かたをつけてしまいます。しかし、こうして出来上がった自分が解釈を、人に伝えたり、語ったりしても、人に感動を与えたり、深い動きを与えることはほとんどありません。おそらく、こうした自分に都合のいいことだけを集めて、語つてお人には云わらないものだからです。



 親鸞さまは寒い冬、流罪の新潟でご苦労されたと聞きました。どんな様子だったんでしょうか。



『第七〇回 年越し勤行』

順慶寺では、年越しの勤行を深夜に行っています。小さい頃から年越しの勤行に参加してきたため、年越しの瞬間を別の場所で過ごしたこと�이ありません。

友人から「年越しにどこでこのカウントダウンに行つたよ」と聞かされると、羨ましく感じたこともあります。今ではそのように思うことはありませんが、年越しを迎えるたびに、ふといのことを思い出します。

新鸞聖人か越後に御流罪にいたれたことをよく知つていま  
したね。

An illustration of a young girl with short brown hair, wearing a pink shirt, holding a small yellow cat. A speech bubble above her contains Japanese text. The background features colorful, hand-drawn style patterns.

そう言えは、三月に咲く桜の花は、強い風で一斉に桜吹雪となり、美しくもあり何か物悲しさのようなせつない気持ちになります。お寺の仕事も年度替わりの時期で忙しく、二月のようにゆつたりと花を愛でる事ができません。

今年の五月には早くも七回忌を迎えます。前よりは少し落ち着いてお参りできればと思います。

「どうして桜じゃなく梅なんて  
梅なんて  
落着くから」と。  
「梅の花は奈良時代に中国から伝  
わって以来、文化的にとても日本に  
根付いているからね。それに寒い二  
月に静かに咲く姿は見ていてとても  
と、尋ねてみると  
すか?」

住職を若院（現住職）に譲つて  
老院となつてから、嬉しそうによく



## 順慶寺だより



修正会のおしるこ接待（1月1日、順慶寺本堂にて）

**今年も開催**

新春寺力フエ寄席

このところ恒例となつた、新春寺カフエ寄席。正月はじめの寺カフエは、愛教大落語研究会の皆さんのボランティア出演による、落語寄席が決まり。今年も一月11日午前10時から順慶寺本堂で開かれました。

今年の寄席は、光家準さん、愛教亭海老ノ介さんのお二人。ともに愛教大的学生さんで、ご両親も駆けつけられたお座は、玄人仕込みの熱演で、本堂に来られた寺カフエのお客さんも大いに喜んで、楽しい時間となりました。



愛教臺海老ノ介さんの落語（1月11日、順慶寺本堂にて）

**ホット** ひとりき  
今年も開催  
**新春奇才フエ奇譲**

例年通り、大晦日23時45分より、順慶寺本堂では、年越し勤行をおつとめしました。

昨年に続き、年越しにしてはあたたかい日となつた今年の大晦日。本堂には、百人を超える参詣者が集まりました。23時45分に除夜の鐘の打鳴し始めると同時に、正信偈のお勤めを唱和し始めました。

から実現された格好。この上もないスタートとなりました。

お勤めが終わると、例年通り、住職 責任役員、護寺会会长の年頭挨拶があり、その後、各自ご本尊の前でお焼香し、お屠蘇、おしるこの接待を受けました。

帰りには、例年通り、住職の年頭の言葉を入れた菓子袋が配られました。

明るい日という意味だった。

「これからが

これまでを決める

(令和八年カレンダー巻頭言より)

一月七日寂岡本光子(73)  
市場上組岡本裕一郎様の母

一月22日寂塚本まさ子(10)  
知立市塚本秋夫様の義母

◆山門の松伐採を決定!! 昨年8月終わり、ごろから山門の樹齢百五十年以上という門かぶせ松が枯れ始め、ついに枯死。原因は松食い虫による線虫被害。庫裏前の松も同時に枯死したことを受け、他に松食い被害が及ばないようにするため、総代その他で協議した結果、一月末に伐採することに決した。

◆一月より北側駐車場の一部駐禁

一月19日より、順慶寺北側駐車場の二部が業者利用のため駐禁となる。駐禁となるのは、北側駐車場の北奥の一部（車4台分）。土日は使用されないため、大法要などほとんどの行事の参詣者や墓地の参詣者が利用するには支障はない。なお、期間は6月末までの予定。

◆順慶寺門徒最高齢の方亡くなる!!

さる一月22日、知立市で川崎屋さんを営んでいた、塚本まさ子さんが逝去された。行年百五歳。百五歳という歳は、住職夫妻の仲人だった、名古屋

年末と元旦にNHKテレビで「西木願寺 伝統と葛藤」という番組が放送されました。実は、年末に見逃した偶然、元旦の放送を見て知りました。内容の深刻さに釘付けとなり、見入っていると、家族も全員釘付け状態。その後、多くの門徒の皆さんから、あね見たか、と指摘され、再びひとりネットで視聴しました。お寺の窮状をルルアしているので、実感しやすく、宗教が伝統だけではないことを痛感した番組でした。(住)

## 修正会で今年の目標

# 「正信偈」を精一杯の声で唱和

この菓子袋を楽しみだとして来られる方に聞いてみると、自宅に帰つてから、住職の言葉を仏間に横に飾り、家族に見せるのだそうです。

華光尼釋院栽農

願樂院釋尼昌華

一月度護寺会物故者

